



開催レポート

令和4年（2022年）4月

信州これから会議事務局
（長野県 企画振興部 総合政策課）

新型コロナウイルス感染症の影響で、社会は一変しました。

多くの方々が、暮らし、仕事、親しい人との交流、趣味、子育てなど、様々な場面で、これまでとは違う日々を送っています。

この先の世界は、信州は、どのように変わっていくのでしょうか。感染症の収束後に迎える未来は、これまでの延長線上にあるものではないようです。

一人ひとりが見えているコロナ後の見通しを持ち寄り、未来を語り合うことを通して、みんなで「信州のこれから」を創造・共有し、来るべき未来を私たちのもとに手繰り寄せることをめざして、「信州これから会議」を開催しました。

県からの呼びかけで、若者からシニア世代まで様々な地域、分野で活躍する方々にお集まりいただき、立場や地域を越えてフラットに、それぞれの知識や経験を持ち寄りながら、「信州のこれから」について活発にご議論をいただきました。

オンラインを活用して延べ9回にわたり会議を開催。議論の結果を、総合ファシリテーターを務めた瀧内貫さんが中心となり、「信州のこれからへ向けた私たちのメッセージ」としてとりまとめていただきました。

参加者の皆さんがコロナ後の未来に向けて想いを込めたこのメッセージを、現在県が検討を進めている次期総合5か年計画等の重要な視点として、参考にしていきます。

開催概要

6つのテーマごとにグループを分け議論を行う第1段階と、第1段階で出されたキーワードを掛け合わせて設定したテーマを議論する第2段階の2部構成で進行しました。第1段階の議論を各論、第2段階を総論としてとりまとめました。

各論（第1段階）

テーマ・実施日程

	テーマ	1回目	2回目	3回目	時間
A日程	①働き方・暮らし方	11/7	11/21	12/12	午前10時～正午
	②文化・スポーツ	(日)	(日)	(日)	
	③地域コミュニティ				
B日程	④福祉・子育て	11/10	11/24	12/15	午後7時～9時
	⑤産業	(水)	(水)	(水)	
	⑥学び				

開催方法

オンライン

参加者

クリエイター、教育関係者、医療・福祉関係者、行政職員、エンジニア、地域おこし協力隊員、学生等、公募に応じた55名

総論（第2段階）

テーマ

第1段階のキーワードを分野横断的に掛け合わせてテーマ設定

「これからの地域社会の編み方」
「これからの暮らし（人生）のレジリエンス」 × 「これからの豊かさ、しあわせをどう実現していくか。」
「これからの支援する人をどう育てるか」

実施日程

令和4年1月16日（日）、1月30日（日）、2月13日（日） 計3回

開催方法

オンライン

参加者

第1段階の参加者のうち有志18名

総合ファシリテーター 瀧内 貫 氏



株式会社コトト 代表取締役のほか、ミリグラム株式会社 取締役、長野県立大学 ソーシャル・イノベーション創出センター(CSI) 地域コーディネーター。（令和3年度当時）

各テーマにおけるファシリテーターは、若手県職員が務めました。

信州のこれからへ向けたわたしたちのメッセージ

わたしたちが暮らす「地域」や「社会」は、コロナ禍により急激に変化しています。その変化により、見えていなかった分断が見えるようになりました。

わたしたちは、視野を広げ、重なりを意識し合い、掌（て）にあるはずの物事を持ち寄って、対話することで、文化や意味を紡ぎ、分断された地域社会を編み直していきたいと願います。

地域社会は、誰かにつくってもらうものではないはず。わたしたち自身が、手を携えて、信州の「これから」を探求していきたいと思えます。

**信州に暮らす、これからの「しあわせ」とは何か。
問い続け、わたしたちの手で実現していく。**

- ① わたしたちの「真のしあわせ」を問い続ける。
それぞれに気持ちの良い暮らしやあり方を探求していく。 (→P6)
- ② 社会的包摂から寛容な地域社会をつくる。
トライアンドエラーを許容するしなやかな関係性を構築していく。 (→P7)
- ③ コロナ禍により、一層顕在化した分断に橋を架ける。
間（あいだ）をつなぎあわせ、共に支える地域社会を創造していく。 (→P8)
- ④ つながる場の選択肢、新たなコミュニティを林立させていく。
それぞれが複数の所属や居場所を持てる社会へ。 (→P9)
- ⑤ 小さな対話をたいせつに。
関係の編み直しから、ソーシャルキャピタルの構築へ。 (→P10)

① わたしたちの「真のしあわせ」を問い続ける。 それぞれに気持ちの良い暮らしやあり方を探求していく。

多様性や包摂性に加え、公平性から、さまざまな「豊かさ」や「しあわせ」の尺度が混ざり合う社会をつくる。それぞれが「しあわせ」を追い求め、自身の暮らし、人生を、自らの意志で選んでいける社会を実現していく。

議論の経緯

これからの「しあわせ」や「豊かさ」のあり方について、「選択肢があること」、「自分の人生をコントロールできていること」、「しんどくない範囲で地域社会に貢献できていること」などといった、自分の人生を自己決定できていることや、他者や社会との双方向の関係性があることなど、物質的、経済的な豊かさにとどまらない様々な意見が出されました。

さらには、「しあわせ」や「豊かさ」のあり方は人それぞれ違ってよく、価値観の多様性が認められ、一人ひとりが公平にそれらを探し求めていけることが当たり前に行える社会を実現していくことが大切、との意見が出されました。

② 社会的包摂から寛容な地域社会をつくる。 トライアンドエラーを許容するしなやかな関係性を構築していく。

急激な変化のある社会の中で、さまざまな価値観の相違が、結果的に多くの分断を生んでいる。多様性を認め合い、小さな挑戦や、失敗を含む試行錯誤が許容される「寛容でしなやかな」地域社会をつくっていく。

議論の経緯

「みんなが当たり前と思っている人生コースが強固すぎて、色々な人生ルートが許容されていない」
「何かにチャレンジするとき、『ルールから外れる不安や恐怖』が足かせになっていて、試行錯誤がしづらい」
「試験の1点の差で人生が変わってしまう。一度の失敗で著しく不利な人生を歩まざるを得ないのが今の社会」
など、特定の価値観や成功のモデルから外れたときに、再チャレンジすることが困難な社会の姿を変えていく必要があるとの意見が出されました。

その上で、

「学校の成績などにとらわれない『評価軸の多様性』が社会に広まっていくことが大切」
「『ごちゃまぜ』な環境があると、違いが当たり前になる」
「『失敗はいけないこと』という認識が浸透してしまっている」
「学校に行かない選択をした子どもや、会社を辞めてもう一度学んでみようと思う大人などへのサポートが必要」
といった、多様な価値観を認め合うことや、自己実現に向けた前向きなチャレンジに寛容さと公正な支援が必要との意見も出されました。

③ コロナ禍により、一層顕在化した分断に橋を架ける。 間（あいだ）をつなぎあわせ、共に支える地域社会を創造していく。

コミュニティを横断しセクターを越えて、つながる橋とそのつなぎ手が必要とされている。それぞれに「個」を尊重し合うことを立脚点に、多世代や地域内外をつなぎ、「これから」の地域を編み直していく。

議論の経緯

新型コロナウイルスの感染拡大によって、前例踏襲で行われてきた地域におけるさまざまな慣例やしきたりが合理化された一方、「地域のコミュニケーションの場がなくなった」、「移住者が地元の人と交流できず孤立している」、「感染を警戒して、助けたい人を助けに行けない」といった、孤立や分断がより一層顕在化した、との声がありました。「しんどいことをアウトソーシング」してきた、これまでの社会の結果ともいえるが、これからの社会では、「ミツバチのように色んな所を飛び回って、人と人とをつないでくれる人」や異なる価値観や言葉遣いを「翻訳する人」がいると、多世代や地域内外の交流も促され、新しい関係性を編み直せるのではないか、という意見が出されました。

④ つながる場の選択肢、新たなコミュニティを林立させていく。 それぞれが複数の所属や居場所を持てる社会へ。

今ある所属や地域の居場所、趣味や興味関心からコミュニティなど、ゆるやかなつながりや多くの所属を持てる社会をつくる。一人ひとりが関係性のなかで感じられる「しあわせ」を持って、地縁のコミュニティと互いに良い影響を与え合っていく。

議論の経緯

「一人ひとりが自分らしい生き方を実現できる社会の姿」について話し合われた場では、「すべての人が何らかのコミュニティに属することができる」とよい、「興味・関心や大事にしている価値観でつながる『テーマ型コミュニティ』がたくさんある」とよいとの意見が出されました。

そうしたコミュニティのあり様としては、「それぞれの負担、犠牲が必要なつながりはあまりよくない」、「自主的なつながりがいい、離脱してもOK」といった、「ゆるやかなつながり」が望ましいとの声がありました。

また、地縁のコミュニティも軽視することなく、個々人が「テーマ型コミュニティ」と「地縁型コミュニティ」を行き来することによって、両者に良い影響を与え合っていくことも大切であるとの意見も出されました。

⑤ 小さな対話をたいせつに。 関係の編み直しから、ソーシャルキャピタルの構築へ。

違和感を声に上げ、対話し続けることを厭わない。対話と観察から、複雑に絡んだ関係性をほどこき、編み直していくことを繰り返す。
対話と実践の場の往復から、信頼と互惠の関係性を組み上げていく。

議論の経緯

多様性を認め合う社会をどう実現していくか、という点について話し合う場では、

「話し合いが基本だが、無理してわかり合おうとすると逆に分断が起きるリスクがある」

「『多様性を認めること』と『分かり合うこと』を両立するのは難しい」

との、対話の難しさを指摘する声がありましたが、

「困っていることや違和感を覚えることについて声を挙げやすい社会であってほしい」

「たとえ相手の意見が自分と違っていても、相手が何故その考えを大切にしているのかを知ることが重要」

「小さなコミュニティの中で、対話を積み重ねていくことが大事」

といったような、対話の積み重ねによって、信頼と互惠の関係を作り上げていく努力を厭わないことが大切、との意見が出されました。

現状認識（コロナで変わったこと）

① コロナを経験してわかったこと

時間や場所に縛られない働き方・暮らし方が普及

オンラインツールの普及により、テレワークが当たり前になってきた。また、コミュニケーション形態が多様化し、時間や場所に縛られない関係性が生まれてきている。一方で、リアルなやり取りや経験に対する価値観が変わってきており、目的や相手に応じたベストな対応が求められている。

② 新たな日常に向け工夫したことでわかったこと

変化する社会、多様な生き方を受け入れる地域と変わらない地域が二極化

多様な働き方・暮らし方を認め、魅力ある地域を発信している地域へ人が集まってきている。コロナ下で選ばれる地域、改めて住み続けたいと思う地域になるためには、地域としてどうあるべきか。

変化する社会に対する対応力に差が生じている

急激な社会のデジタル化への対応力に個人差が生まれた。情報格差が激しくなり、個人によって行動を選択できる幅が異なっている。

働き方・暮らし方のこれから

この地域で生きていく幸せを考え続ける。
生き方を再定義し、「働き方・暮らし方」を
選択できる地域社会へ。

① 常識を変革し、多様性を認め合う社会へ。
働き方をアップデートする。

変化する社会の中で、常識にとらわれない多様な働き方を実践する人が増えている。自分の好きなことを生業にする人、1か所にとどまらない働き方を実践する人。それぞれが「本質的な幸せ」を考え、自分に合った働き方を追求し続ける。

② 多様性から、職住が「接近」している。
「境目のない暮らし」を、新しいライフスタイル
の選択肢として定着へ。

家事、育児、仕事、介護、娯楽などの境界線を取り払い、一人ひとりが自由に暮らしをデザインする。従来の「ワークライフバランス」の枠組みにこだわらず、自分らしいライフスタイルを築く。

③ それぞれが、働き方・暮らし方の「実践」を
発信。多様なチャレンジを信州から。

多様なスタイルを認め合い、支援する社会の実現を目指す。それぞれが多様なチャレンジを踏み出し、県内外へ発信。Try&Errorを恐れない社会へ。

現状認識（コロナで変わったこと）

① コロナを経験してわかったこと

不要不急とされたが、生活の豊かさを彩る大切なもの

文化・スポーツはコロナ下では不要不急とされた。しかし、人と人を繋げ、生活を豊かにするために不可欠であると再認識。

一流の芸術に触れる機会がなくなった

もともと信州は大規模・著名な文化・芸術に触れるための施設や機会が少ない。移動制限で一流の芸術が県内に来なくなったことにより、一流に触れる数少ない機会が失われている。芸術レベルの底上げがますます遠のいている。

② 新たな日常に向け工夫したことでわかったこと

オンラインでは代替できない価値がある

オンラインによりイベント等が代替されたが、質感や空気感は伝わらず、共感も生まれにくい。また、観客の反応を感じられず作品や技術も向上しない。本物に触れ、場を共有することの価値が際立った。

足元の価値を拾う中で、地元と相互に影響を及ぼし合う

地域でアートが開かれるようになり、地域資源を活かした取り組みが活発になった。外からアイデアをもらい、地域は、これまで気づけなかったその土地の新たな価値を認識する。一般協力者や参加者が生まれる。

「文化・スポーツ」は不要不急ではない。本来の価値から、共感と交流が生まれていく未来へ。

① 文化・スポーツが暮らしに根付く社会を自らの手で。地域に暮らす自分たち自身が、街の文化を耕していく。

住民が地域にある文化やスポーツに興味・関心を持ち、一流でもカジュアルでも、すべてのプレーヤーが混じり合う社会。地域性や業界の垣根を超えて、街全体がアーティストやアスリートを支え、多様な文化やスポーツが暮らしにあふれている社会へ。

② 特異な才能と「出会える」地域に。あたりまえに活動できる環境と自然に交流できる状況をつくる。

どんなジャンルの一流でも不自由なく活動でき、技を高められる環境を整える。ロールモデルの彼ら彼女らがあたりまえに混じり合っている社会では、住民との交流も生まれ、後継者となりうる次世代の子どもたちを育てていく。

③ 文化・スポーツに触れる「タッチポイント」を増やしていく。多様な繋がりをつくる「繋ぎ手」を育てていく。

プレーヤーと受け手の両側の本音を知り、共通点を見つけ、双方向に良い影響を及ぼせるような仕掛けを作る存在が重要。一流とカジュアル、文化と文化、プレーヤーと受け手、都市と地域等、さまざまな繋がりを見つめ、支える存在に。

現状認識（コロナで変わったこと）

① コロナを経験してわかったこと

前例踏襲への問い

前例踏襲でやってきた地域活動の必要性を立ち止まって見直す機会になっている。

コミュニケーションが生まれるきっかけに気づく

慣例的な集まりが無くなり、楽になった一方で、そうしたコミュニケーションの場が深い人付き合いを生んでいたことに気付いた。

移住者の孤独

コロナによって若者や移住者が増えているが、地域とのコミュニケーションがうまく取れず、孤独を感じている人もいる。

② 新たな日常に向け工夫したことでわかったこと

画一的な行政サービス

地域の助け合いは普段以上に緊急時にその真価が発揮されるが画一的な行政サービスが代行するようになり、取りこぼしが起きている。

地域コミュニティのこれから

「地域コミュニティ」のありかたを考えていく。
これからの地域の「再定義の状況」を
どう迎えるか。

① 地域を繋ぐ「交流を生む装置」と「通訳者」があふれる地域コミュニティへ。

地域の共通言語や駄菓子屋・フリーマーケットなどの人が集まる場のような「交流を生む装置」。住民同士を繋ぐ「通訳者」。これらを地域内で溢れさせる。

② 一人ひとりが地域に関わりを持ち、自らが地域コミュニティを再構築していく状況をいかにつくるか。

行政が画一的に管理する領域でもなく、私的な領域でもない、そこに住む「みんな」で支えていく領域を、いかにして住民の主体性によって再構築していけるかが問われている。

③ 柔軟性に富み、変化を恐れない地域コミュニティとは。持続可能な地域のあり方を問い続ける。

移住者、若者、高齢者などの多様な価値観が混在する中で、一人ひとりの違いを受け入れ認め合うことで、居心地のよいコミュニティをつくっていく。

現状認識（コロナで変わったこと）

① コロナを経験してわかったこと

コミュニティの分断が加速、社会的孤立が顕在化

「自分がコロナに感染したら周りが大変なことになる」という意識から人との交流を控え、助けたい人を助けられない状況が生まれた。コミュニティの分断が加速し、もともとあった社会的孤立も顕在化した。

② 新たな日常に向け工夫したことでわかったこと

オンラインという新たな選択肢とIT格差

オンラインで会えない人とコミュニケーションがとれたり、新たな事業やサービスが提供できるなどのポジティブな変化があった。子どもの発達面ではマスクによるコミュニケーションの制限から悪影響も懸念されるが、オンラインで遠く離れた友人につながるができるなど、良い面もみられている。一方で、どうしてもITについていけない人との格差やそもそもオンラインツールを使いたくない人がいる等、個人の経験や価値観による生き方への多様な対応が求められている。

オフラインの重要性

体験学習などの経験や、その人が本当に必要としている支援を把握するためにはオフラインが必要である。

多様性を認め合い、誰一人として取り残さない、それぞれの自己実現ができる社会を目指していく「福祉・子育て」へ。

① 情報発信と共有の充実から、持続可能性や相互理解など複眼的視点を持って、社会的包摂の場を組み上げていく。

コロナにより変化するスピードが増した社会の中で、個人を取り巻く環境はより複雑化が進んでいる。地域内の環境を観察し、異なる個人のあり方を知り合うこと。個別性、多様性を尊重し、積極的な環境整備、場づくりに関わっていく。

② つながり方の選択肢を増やし、誰でもいつでも社会参加できる仕組みをつくる。

コロナ禍で、近所のお茶飲みや子育て支援センターでの交流など、情緒的な豊かさを支えていた日常でのつながりが薄れた。社会参加のツールであるオンラインサービスへのサポートをきっかけに、今後また訪れるであろう急激な変化のなかでも、個人の希望に沿ったつながり方を選択でき、社会参加できる仕組みを、協働により実現していく。

③ 主体的で個別性のある「しあわせ」を起点に、双方向で、心地よいお互い様の関係性が広がる社会へ。

高齢者支援、障がい者支援、子育て支援等の専門性の上に、1人の人間として助け合う双方向の関係性を構築できれば、個人と社会の「幸せ」の実現につながっていく。

現状認識（コロナで変わったこと）

① コロナを経験してわかったこと

消費者の需要が量から質へと変化した

パッケージ型の「大量生産・大量消費」が通用しづらくなり質的な付加価値をもったカスタム型へ注目が高まった。観光においては人気スポットへの大量集客が難しくなり、地域内・少人数での旅行が注目されるようになった。

大規模を追わず、ターゲットを絞っていた企業は打撃が少なかった

多くの人に人気なわけではないが、ターゲットを絞り、強い結びつきのある顧客を獲得していた事業者は、コロナ下でも顧客があまり離れず、打撃が少なかった。

② 新たな日常に向け工夫したことでわかったこと

変化に対応できた事業者とできなかった事業者に分かれた

感染拡大から2年近く経過したが、緊急対応後に今後の戦略を考え、変化に対応しようとした事業者は比較的打撃が少なかった。

時代も環境も変化が予測できない社会に。

レジリエントな「産業」の稼ぎ方とは。

① 量から質への転換により「刺さる」サービスを。生産過程の質を付加価値に。

多くの人の興味を引くことを狙うのではなく、他者と競合しない個々の強みをそれぞれが見つけ、狙ったターゲットに深く刺さるサービスを提供する。独自の地域資源を活用して生産過程の質を付加価値にする。決して大きくないが個性的な取組みを知らせ、享受者とつながる媒体として、オンラインを使いこなしていく。

② 地域やセクターを超え、多様な関係者を巻き込み、その組み合わせから強くしなやかな地域産業を構築していく。

農林業者・観光業者・住民など、地域を題材として多様な関係者を巻き込み協力しあう。地域に根ざした事業者による新しく個性的な取組みと豊富なノウハウを活かしてスケール化・持続化できる事業者との組み合わせから、健全な競争関係を構築し、状況の変化に対応できるしなやかな産業をめざす。

③ 一時的な動きだけでなく「その先」を見通すチカラを養う。

コロナ収束後、一時的に需要のリバウンドが想定されるが、単純にそれに合わせて人材や物資を確保すると、需要が収まった際に供給過多となる。また人口減少は悲観的に語られることが多いが、それが追い風になる業界があるのも事実。あらゆる産業の従事者は、需要の大小に関わらず長期的に物事をとらえ、柔軟な戦略を立てることができる「視座を養う」ことが重要。

現状認識（コロナで変わったこと）

① コロナを経験してわかったこと

学ぶ方法の多様化と選択肢の広がり

オンラインでの学びの進展により“オンラインの便利さ”に気付きツールとして浸透しつつある。学ぶことを選択肢が大きく広がった。

リアルの大切さ

一方で、人とのつながりなど“リアルだからこそその価値”が再認識された。

つながることの必要性

学校教育以外でも、人とのつながり、大人と子どもの接点を持てる場（学びの入り口）が必要。

② 新たな日常に向け工夫したことでわかったこと

探求・問い続けること

自分に向き合う時間が増え自己研鑽する機会が増えた。自分がどう生きるか、どう生きたいかを考えることが大切で、それを実現するための手段として学びが必要。

主体性

パッケージ化された（受け身の）学びの“メニュー選び”だけではなく、自ら学びを“デザイン”する主体性が必要。

アップデート

大人が学べていない。いざという変化に対応しきれない人も。変化が激しく、長い人生を送る時代にあっては、教える側も教わる側もアップデートし続けることが必要。

人生100年時代の「学び」とは、
学び合いから、自分をアップデートし続ける
人をつくっていく。

① 急激で連続する変化に対応できる「人」に育つには、
主体的に問い続ける姿勢をマイプロジェクトに。

学びに終わりはなく、日常の様々な場面に気づきのタネが広がっている。変化の多い社会に対応していくために、一人ひとりが年齢関係なく問い続け、学び続ける姿勢と余白を持つ必要がある。誰でもいつでも学び始められる、きっかけとなる学びの選択肢を増やしていく。

② 教えると教わるが入れ替わり、コミュニティを横断
する「学び合う」社会の構築へ。

大人と子ども、地域などのコミュニティに境界線はない。様々なバックグラウンドを持つ人同士がつながることで、新たな視点を得たり、新たな関係性が生まれる。世代や地域の垣根を越えた「学び合い」を日常の光景にしていく。そのつながりのタッチポイントをつくる。

③ 地域全体が学びの場に。地域の接点から学校教育自体
にも影響を。

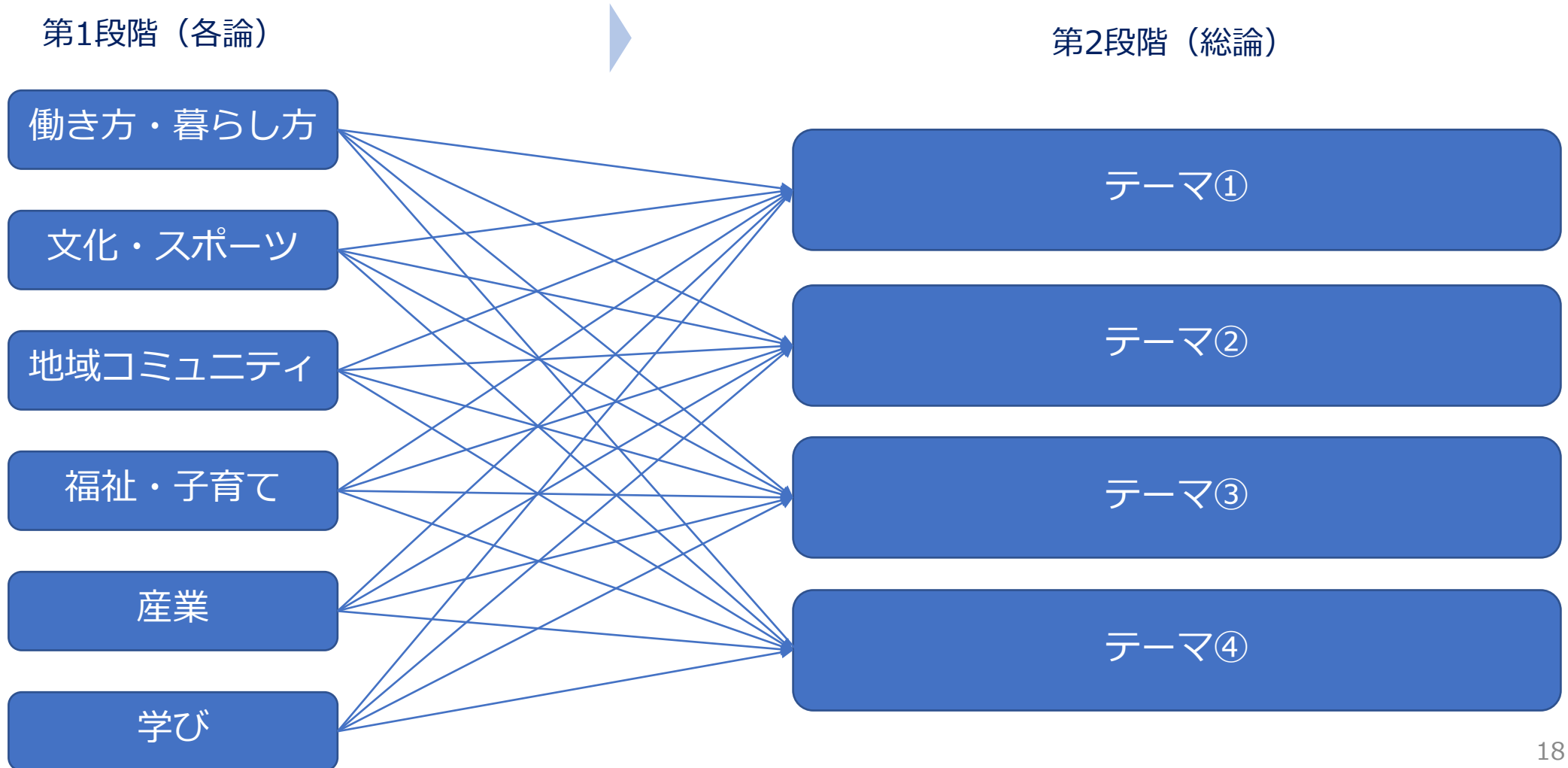
全ての人の学びの礎となる学校教育の現場も、変化に対応していく必要がある（そのひずみが学校以外の場を求めている）。教育現場の外側に多くのお会い（情報、人、場所など）に誰もがアクセスし、参加できる学びの場を整える。学びに携わるそれぞれプレイヤーが影響し合い、連携することで、学びの多様性と公平性を確保する。そのタッチポイントとつながる一歩を踏み出す人を増やす。

信州これから会議開催レポート 参考資料

- 議論のプロセス
- 第1段階（各論）
 - 議論の進め方
 - 議論の経緯
 - 参加者の行動宣言
- 第2段階（総論）
 - テーマ設定
 - 議論の経緯
 - 参加者の行動宣言

議論のプロセス 具体から抽象へ

第1段階では、新型コロナウイルスの影響により大きな変化が起きている6つの分野についての未来像を語り合い、その議論の過程において出されたキーワードを分野横断的に掛け合わせて設定したテーマを、第2段階で深めました。



第1段階 議論の進め方

第1回

コロナ下の変化について
コロナでどう変わったのか、どう変わっていくのか。 → **抽出・発散する**

第2回

その変化をプラスにもっていくために、
何が必要でどうチャレンジするのか。 → **集約する**

第3回

まとめの確認
自身がどう関わっていくのか。 → **まとめる**

第1段階 「働き方・暮らし方」議論の経緯

第1回 11月7日（日）、第2回 11月21日（日）、第3回 12月12日（日）

ファシリテーター

石井貴広
横山紗央里

場所や時間に縛られない働き方、暮らし方が普及するなか、これから私たちは「どう働き、どう暮らすか？」
「本当の豊かさとは何か」を対話の中から探りました。

第1回 「コロナ下での働き方・暮らし方の変化とは？」

- 在宅勤務やフレックスタイムなど、働き方の環境整備が進んだ
- オンラインは便利！移動がないし、会議がしやすい
- コロナが、生き方、働き方を再定義するチャンスになっている
地方移住にもつながっている
- 働き方の多様性を認め、選べる環境を作っていく必要がある
- 本質的な幸せに気づいた人が多い。コロナに対応できる人はますます地方を移動するだろう
- あの地域の、あの人に会いたい、という関係性づくりができるかどうかにかかっている

POINT

- 働き方・暮らし方の多様性が増した。オンラインとリアル、どちらにも良さがあり、選び取ることが大事。
- 生き方・働き方を再定義するチャンスに。再定義し続けることが大事に。
- 人それぞれの幸せを追求する中、地域は、変化に対応できているかどうかで差が生まれている。

第2回 「新しい暮らし方、働き方とは？ どうやったら実現できる？」

- 特徴的な働き方・暮らし方をしている人の事例を発信してはどうか
- 挑戦している人たちのとんがった取組を後押しする必要がある
- 働き方・暮らし方を変えたくても生活や会社の都合で変えられない人もいる
- 社会的な制約のために行動を起こせない人もいる
ルールを変えていかなければ
- やってみる場をつくる
やればできるし、やらないとできない
- オンラインを使いこなせない人たちのために、できる人たちのコミュニティの輪を少しずつ広げる

POINT

- 新しい暮らし方、働き方を発信、実践する。とんがった事例を集める。
- 個人で変えられない部分はある。制度の変化は必要。組織にも働きかける。
- 挑戦している人同士のコミュニティの輪を広げていく。

第3回 とりまとめ（案）に対する意見交換

- 変化しないといけないといったニュアンスに感じる
変化したくない人の考え方も含めるべき
- 変わらないことを選択することがリスクであるのも事実 情報として知ったうえで変えない選択をすることが必要
- ロールモデルとまでいなくても、小さい事例や失敗例も含めた情報発信が大切
- ロールモデルはすでに成功している感じがある
そこまでではなく、多様なチャレンジ、多様な一歩をみたいな表現の方がいい
- 考え始めて、考え続けるのが大事
トライ&エラーしよう
- 個人でいろいろなところに出向く人は選択肢に出会う可能性が高い。出会うためにはチャレンジし続けることが大切

働き方・暮らし方のこれから

この地域で生きていく幸せを考え続ける。
生き方を再定義し、「働き方・暮らし方」を選択できる地域社会へ。

→詳細はP11

第1段階 「文化・スポーツ」 議論の経緯

第1回 11月7日（日）、第2回 11月21日（日）、第3回 12月12日（日）

ファシリテーター

大日方美穂
矢作郁瑠

コロナ下ではイベントが軒並み延期や中止に。芸術、エンタメ、伝統文化、スポーツの価値、醍醐味とはなにか。対話の中から探りました。

第1回 「コロナ下で創作活動やイベントなど文化スポーツはどう変化したか？」

- 文化イベントやスポーツ等が不要不急のものとして扱われることには納得はする
- しかし文化・スポーツイベント等は人と人を繋げてくれるもの 無くなってしまうと心が落ち込んでしまう
- オンラインで国内外の作品を見るチャンスが増えることで、「高尚なもの」から「身近なもの」に変化した
- 地元によりフォーカスした創作活動・舞台芸術が増えた
- リアル（実物）だからこそ感じられる作品の質感や凹凸、雰囲気や大事になった
- アートとまちづくりの担い手の境界線が曖昧になっている

POINT

- 文化やスポーツは心の豊かさのために必要。
- オンライン鑑賞等の導入により客層や集客エリア、心理的な距離に変化が生まれている。
- オフラインは提供側として価値の見直し（改めてリアルでやる意味）を必然的に求められる。臨場感など、オンラインで得られない価値も再認識された。

第2回 「文化・スポーツの役割とは？ これから必要なこととは？」

- 文化スポーツの持つ「豊かさ」は、人々との交流を形作るもの、多様な価値観に触れることができること、感情を共有することにある
- アーティストが地域に根差した活動を行うことで、地域の人たちが新たに文化・スポーツのプレイヤーになっていく
- そうすることで文化やスポーツをきっかけに街を耕していく（ハードルを下げる）ことになると思う
- アートやアーティストを丁寧に集めて、地域の人達になるべく良いものとして提供していくということに今後チャレンジすべき
- ロールモデルによって輪が広がることに繋がり、個人を高めることにも繋がる
- それらを繋げる・広げる役目の人がいると内輪だけのものにならないと思う

POINT

- 文化・スポーツが信州の暮らしに根付いていくために、裾野を広げていく。
- トップレベルを身近に体験できる環境が必要になってくる。
- 文化スポーツを通じて繋がっていくためのサポートをどうつくっていくか。官民を越えた仕組みが必要となっていく。

第3回 とりまとめ（案）に対する意見交換

- 「つなぎ手を育てていく」は特にやっていかなきゃと思う。「つなぎ手」の重要性を認識した。
- スポーツも文化も、全然関係のない人には関係がない。そういう人たちも含めて社会。
- プレイヤーに対する「すごいね」という言葉は、一見応援しているようで、他人事として受け止めているように感じる
- 色々なグラデーションのプレイヤーがいる社会が実現していれば、すごいねと言われるのかなと思う。
- 「認め合う」というよりは「混ざり合う」。まずはそこから。
- 移住者などによる、歴史的な脈や経緯を踏まえないリノベーションはうまくいかない。地域の人たちと話をし、地域を知ること

文化・スポーツのこれから

「文化・スポーツ」は不要不急ではない。本来の価値から、共感と交流が生まれていく未来へ。

→詳細はP12

第1段階 「地域コミュニティ」議論の経緯

第1回 11月7日（日）、第2回 11月21日（日）、第3回 12月12日（日）

ファシリテーター

中沢一貴
森山佳祐

コロナ下で寄合や祭礼等の中止で地域のつながりが希薄に。これからの地域コミュニティはどうあるべきか？

第1回 「地域コミュニティはコロナ下でどう変化したか？」

付き合いがシンプルになり、深い付き合いがなくなった。葬儀も簡略化されている。今後の標準になっていくのではないか

付き合いをどこまで線引きするか。ただ地域で支えていたものが成り立たなくなる弊害も出てくる・出てきている

地縁関係の希薄化が進み、孤独となっている住民をコミュニティとしてどう向き合っていくか？

地域の繋がりをベースとしたコミュニティが必要に思う。そうしたものが居場所や安心感になっていく

移住者は地域のことが分からず、孤立感がある。キーパーソンを見つけるのが大変。気軽に立ち寄れる拠り所があるとよい

自分たちで地域コミュニティの中で必要なものについて取捨選択、維持・形成していくかを考えていく必要がある

POINT

- 会えないこと = 「人付き合い」の形の変化が生まれている。これまでの地域での務めが変化。
- やらないことで楽に、ではなくどう担っていくかが大切。その変化により、入ってくる人たちにとっても「いいこと」（入ってきやすさ）が生まれている。
- 誰にとってももの居心地が良く、安心につながる場づくりについて考えていく必要がある。

第2回 「これからの地域コミュニティのあり方・担い手の役割とは？」

共通の話題（田植え等）や寄り合いからコミュニケーションが生まれていた。不便さが、むしろ人と人との繋がりを生んでいた

地域の困りごとをシェアして、足りないものを補う、サポートしあうコミュニティを作っていきたい

感覚の違いでうまくコミュニケーションが取れないということがある。価値観のすり合わせをするような、通訳をする人が必要

地域の姿は場所によって違う。地域の特色を知ったうえで、地域の人知らない情報を取り上げ、皆で話す機会を作りたい

若い人から学ぼうという姿勢のある地域はうまくいく。外の人を受け入れる側の気持ちが大事になってくる

自分たちで考えて、必要だと思うことを実践しようとする意識が大切

POINT

- 「地域の不便」「困りごと」「共通の話題」からコミュニケーションが生まれ、それが繋がりとなっていく。
- 地域の人を巻き込む力のある人、価値観のすり合わせをするような、通訳（媒介）者が必要。
- つながりをつくる仕組みや人が必要で、それぞれの役割があり、それは誰かがやってくれることではない。

第3回 とりまとめ（案）に対する意見交換

共通言語、認識が重要だと感じた。問いを投げかける人、場所が必要だと感じた

ある地区では大きな地震の直後、どう支えていくかを住民自身が考えていくようになった

お金が先行してしまうと継続性のない取組で終わってしまう。住民自身が問題意識を持つことが大切

ただし活動のための資金調達に苦勞することも。資金や場所も含めて考えていかないといけない

地域をどう再定義するかは住んでいる人、移住してきた人が地域のことをどう自分事としてとらえていくかにあるのでは

結局は話すことは重要。そうした場を行政なりが作っていく

地域コミュニティのこれから

「地域コミュニティ」のあり方を考えていく。これからの地域の「再定義の状況」をどう迎えるか。 →詳細はP13

第1段階 「福祉・子育て」議論の経緯

第1回 11月10日（水）、第2回 11月24日（水）、第3回 12月15日（水）

石井貴広
見小田早織
森山佳祐

コロナ禍で困っている人と周りで支える人の距離が遠くなっている。

困っている人を支えるのは誰か？共生社会とは何か？

第1回 「コロナ下での福祉・子育ての変化は何か？」

お年寄りが通いの場に行けなくなった。他人と接する機会が激減したため、認知機能や体力が低下している人が増えている

「孤独」が健康を害する要因になっている

学校が一斉休校になり、学校での先生や友達との繋がりが分断されてしまった

助けたいときに助け合えない。オンラインとリアル併用が必要。リアルで会うことが重視される場も残す

ITに対して苦手意識を持っている人が多く、自分には無理だと思う高齢者もいる

テレワークの推進により、男性が育児に関わる機会が増えた

POINT

- 社会的孤立やコミュニティの分断が顕在化した。
- IT格差の問題が顕著に。
- 男性の育児参加が増える等のポジティブな変化もある。

第2回 「コロナ下での福祉・子育ての課題にどう立ち向かうか？」

様々な社会参加への選択肢がある中で、取り残されてしまう人への支援も必要である

高齢者や障がい者であっても、オンラインとオフラインに関係なく個人として社会に参加できることが大事

オンラインだとその人の表面的なものしか伝わらない。その背景にある根本的に必要な支援を把握するためにはリアルな対面が必要

オンライン・オフラインのメリットを取り入れたソフト・ハード両面での社会の中での繋がりが必要

世の中にフィットしないと感じる人たちの支援がしたい。移住してきた自分もある意味地域にフィットしていない

成長したり、学校へ進学するにつれて感じた生きづらさに対して問い続けている

POINT

- 気軽に会えないことから生まれた社会的な孤立やコミュニティの分断を超えるために、オンラインへの取組をさらに進めていく（使い方支援も含めて）。
- 主体的な助け合いへの参加意識をどうつくっていくか。
- 支援が必要な人が増えていくなかでの取組を考えていく必要がある。

第3回 とりまとめ（案）に対する意見交換

「福祉」の考え方が旧来型の弱者救済的な welfare として使っているが、「福祉」は well-being（個人の主体的な自己実現）という概念に移り変わっている

「支援される側」と「支援する側」というのが分断を生んでいる。双方向的な関係性や双方向のケアの方がこれからのケアなのではないか

制度的には、弱者救済の方法が分かれているのが問題。どんな人でも包括的に支える必要がある

ごちゃまぜの関係でお互いが関わっていくそんな環境が表現できればいい

各場所でのつなぎ役（地域をつなぐ学校の先生、地区長など）の考え方は重要。声を拾い、容認するためにはやはり「対話」だと思う

個人の能力向上に関係なく、サポートできる社会の環境が用意されていることが大切。そういう表現が盛り込まれていけばいい

福祉・子育てのこれから

「福祉・子育て」のこれから

多様性を認め合い、誰一人として取り残さない、それぞれの自己実現ができる社会を目指していく「福祉・子育て」へ。 →詳細はP14

第1段階 「産業」 議論の経緯

第1回 11月10日（水）、第2回 11月24日（水）、第3回 12月15日（水）

ファシリテーター

倉田早希
矢作郁瑠

コロナ禍で人々の消費行動が変化。人口減少時代、県内産業はこれからどう稼ぐか？

第1回 「コロナ下で信州の産業はどのように変化したか？」



長野県の観光は大量生産・大量消費スタイルだった。それが通用しづらくなり、個人をターゲットにした「より響く」ものごとを提供するようになった

「誰もが楽しめる」から「好きな人がより楽しめる観光」へ変化している



BtoB領域で企業同士がその地域内で支え合える関係が作れると、わざわざ都会の企業に仕事を頼らずに、地域経済が回っていく仕組みが作れる

今後は企業間の受発注という関係性から企業同士が一緒に作っていく=コラボレーションが大事になっていくんじゃないか



変化についていくための対策ができていた事業者は現在も打撃が少ない変化を嫌う人にとって今はかなり厳しい時

常に考え続け、対応していくことが、変化が起きた時への予防になる



POINT

- 量から質のへと変化している。大規模を追わない、ターゲットを絞るなど、負けない強みを持つことが生き残り戦略上大切になってきている。
- 企業同士のコラボレーションが大事に。
- 変化に対応するために考え続けることが大切。

第2回 「変化する産業に対してどのように対応していくべきか、どんな仕組み化ができるか？」



その土地の歴史や食、文化、人等の魅力を発信し、地域の人が語ることで、「その地域ならではの」が生まれ、消費・稼ぐに繋がる

生産過程のストーリーの付加価値を向上させることで「生産プロセスの質」を磨き、それを強みにするべき



地域資源を活かすのが得意な小規模事業者が大企業の力を借りて、共存できないか

小規模事業者が作り出すオリジナリティ（価値）を認めて、そういったものを集約することで、大企業も利益を出せる形に



新しい風を起こすのは、移住者のベンチャーが多いしがらみや固定概念がない

チャレンジができるための状況・環境づくりも重要



POINT

- 信州の産業の強み=生産プロセス・体験の質を活かした地域資源を活用していく
- 挑戦できる状況・環境づくりが地域の産業に新しい風を起こす

第3回 とりまとめ（案）に対する意見交換



“長野の強み”をキーワードとしてもっと盛り込めないか。長野県の自然の要素を盛り込めば、新しい産業の形がありそう

地方に行くほど事業者が少なく、競争が起これない。新しい人が新しいことを始めやすい環境はあると思う



新たな取組をやりようと思った人がのびのびできる環境づくりも大切

事業者間の健全な競争環境を推奨する。その中でのポジティブな協働や淘汰、再参入が活発に行われることを期待する



今後コロナ感染が収束しても、オーバーツーリズムが起これるイメージが湧かない

質をとるビジネス、量をとるビジネス、プレーヤーが選択できる自由があることが重要



産業のこれから

「時代も環境も変化が予測できない社会に。レジリエントな「産業」の稼ぎ方とは。」

→詳細はP15

第1段階 「学び」議論の経緯

第1回 11月10日（水）、第2回 11月24日（水）、第3回 12月15日（水）

ファシリテーター
北澤淳
山本美彩子
横山紗央里

人生100年時代、コロナ禍のような社会の大きな変化は生きているうちに何度か起きるだろう。

これからどう学ぶ？ どう自分を変える？

第1回
「コロナ下での学びの変化、そして学びとは何か？」

従来の学習環境にオンラインやICTが浸透し、現場がその良さに気付き始めている

在宅勤務が続いたことで、自分に向き合う時間が増え、自分の学びを深めることができた

効果的な学びを行うために学校はどういう役割を担うべきなのか考え続けている

自分で問いを持ち、答えを探し、形にして、また問いが生まれるという一連の「探求」が学びなんじゃないか

できるようになる、わかるようになる、このワクワクが学びで、一生涯続けていくことが学び続けられるということ

「学ぶ気持ちを忘れない」ためにどうしたらよいか
その場をどう構築していくか

POINT

- 学ぶ環境を提供する側もどう生きているかが問われている。
- 学ぶ選択肢が多様化している、新しいサービスが一気に常識化した。
- 自分をアップデートする学びへの姿勢が問われている。

第2回
「学び続けるために必要なこととは？」

何歳になっても学び続ける姿勢を持ちたい
子どもが余白を持てることが大切

子どもの留年があってもいい
子どもたちの教育にも様々な選択肢が必要では？

いろんな人に会ったり、いろんな場所に行ったり、いろんな出会いによって見えてくる

なんでも楽しめる
その感覚が身についている人は学び続けられる

なんでも自分の興味関心がある分野に結び付けられ、自分事にできることが大事

大人と子供が接点を持てるような学びの場を作る

POINT

- 大人も子どもも教えると教わるが入れ替わりながら、学ぶ場をどうデザインするか。
- 学び合い、問い続ける姿勢こそが大切。
- 学校教育の話が多く出ているが、大人の学びとも通底する。

第3回
とりまとめ（案）に対する意見交換

学び合う時代になった。境界、固定観念に囚われずに、学校もアップデートする必要がある

知らない世界を教えてくれるのは、子どもたちの世代かもしれないし、自分よりも上の世代かもしれない

「学ぶのがいやだな」って人も実は学んでいる
もっと身近にある学び、おしつけられずにみんな学んでいる状態が理想

「どうしたらいいのだろう？→学ぶことの面白さ→小さいころの経験」が大事

教育は格差を是正する装置のはず
頑張れる層の背中を押すことも必要だが、事情により頑張れない層を取りこぼさないように

多様性の中で、自分と異なる視点、価値観、異なる発想に触れ合うことで、学ぶ意欲も高まるのではないか

学びのこれから

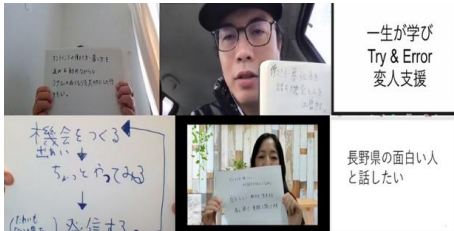
「人生100年時代の「学び」とは。学び合いから、自分をアップデートし続ける人をつくっていく。」

→詳細はP16

第1段階 参加者の行動宣言①

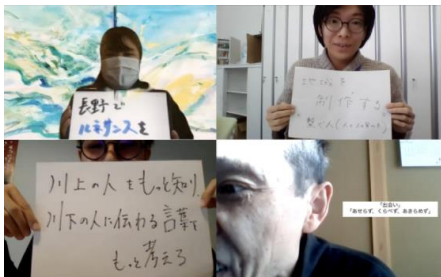
第1段階終了に際し、参加者の皆様お一人おひとりに、今後に向けた「行動宣言」をしていただきました。

「働き方・暮らし方」



- ・ オンラインでの働き方・暮らし方を進め&勧めながら、リアルのぬくもりを大切にしていきたい
- ・ 働き方・暮らし方を話す機会と人を増やす
- ・ 一生が学び Try&Error 変人支援
- ・ 機会（出会い）をつくる→ちょっとやってみる→発信する→機会をつくる（出会い）…のループ
- ・ デジタルを使いつつ対話も大切にしながら、自分らしい働き方・生き方を考え続け、実践し続けます
- ・ 長野県の面白い人と話したい

「文化・スポーツ」



- ・ 長野でルネサンスをおこす。
- ・ 地域を製作する ※製作するとは、繋ぐ人（人と人の営みを）であること長野の地域と人の営みをつなぐようなことをしていきたい
- ・ 川上の人をもっと知り、川下の人に伝わる言葉をもっと考える
- ・ 人をつなげる以前に、川上の人を自分はまだ知らない 川上の人に出会い知ったうえで、川下の人にわかりやすい言葉で伝えていきたい
- ・ 「出会い」スポーツのみならず、色々な分野の人と出会うことで、刺激を受けながら、自分も発信し続けていきたい モットーである「焦らず、比べず、諦めず」を大事に活動していきたい

「地域コミュニティ」



- ・ 農業とITを互いに教え双方向のリテラシー向上
- ・ 人との対話を大切に、共に考え共に動く
- ・ 地域を楽しく考える主体人作り講座開校
- ・ 「問い」かける場所を創る
- ・ それぞれの過去の自分事が地域の役にも役立つことを応援していきたい
また地域の役に感謝し、卒業証書を送りたい
- ・ 福祉をキッカケに地域の再構築を！
- ・ 地域を知る人を知る
- ・ 地域のことは地域の人が1番知っている。地域から学ぶ姿勢を忘れずに
- ・ 誰が上でも下でもない 対等な関係を忘れない、気をつける

第1段階 参加者の行動宣言②

「福祉・子育て」



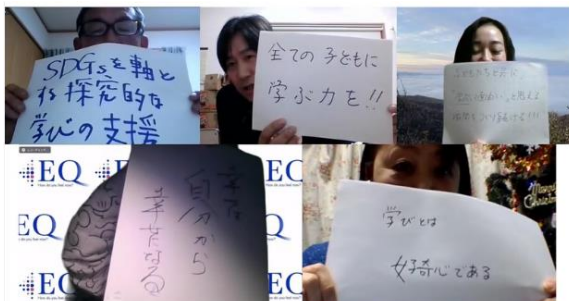
- ・社会的処方の実装
- ・新しい社会に即した福祉・子育てのカタチを考える！
- ・今ちょっと世の中にFitしていない人たちの場所を創りたいです
- ・皆にやさしい地域をめざして居場所・通いの場を開きます
- ・「ハート」ある人とつながって、老若男女みんなが集う「場」をつくります

「産業」



- ・「地域循環共生社会」をめざす（自然×産業×まち・地域づくり）
- ・新しい視座を養うために、新しい出会いを作る！（毎日、毎週、毎月）
- ・（地域の憩いの場となるような）小商いをひとつはじめる

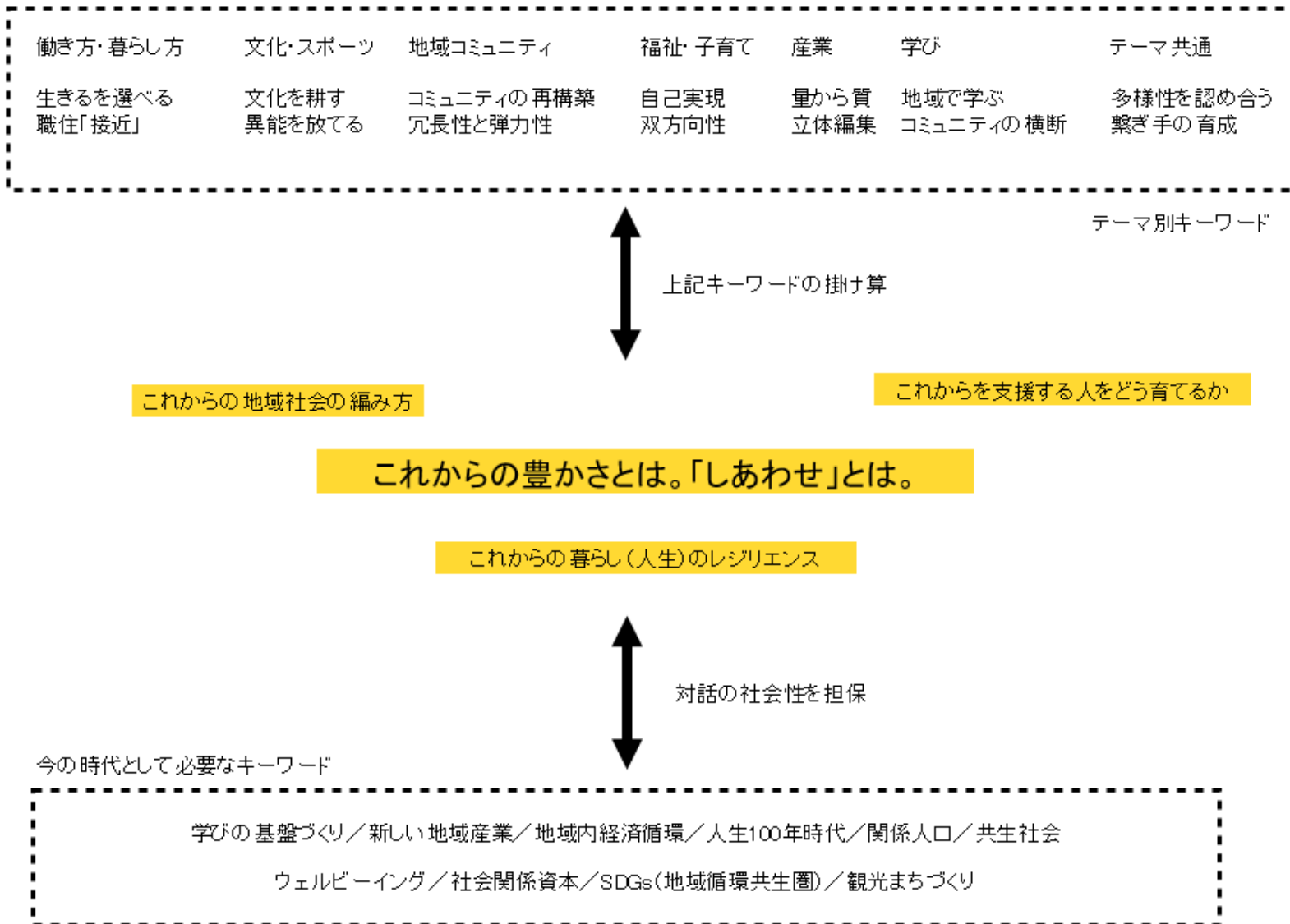
「学び」



- ・SDGsを軸とする探求的な学びの支援
- ・全ての子どもに学ぶ力を！
- ・子どもたちと共に、「学ぶって面白い」と思える瞬間をつくり続ける！
- ・幸せは自分から幸せになる
- ・学びとは好奇心である

第2段階 テーマの設定

第1段階において各テーマに共通して出されたキーワードと、昨今の社会情勢において重要なキーワードを掛け合わせて、第2段階のテーマを設定しました。



第2段階 テーマの設定

■ 第1回

① これからの地域社会の編み方

コミュニティの再構築について、さまざまなテーマで話し合われた。セクターを越え、コミュニティを横断する地域社会、多様な中に包摂性のあるコミュニティのあり方をどう構築するか。

協働と共創、関係人口、地域での学びの場、変化を恐れない地域社会をどう残していくのか。

② これからの暮らし（人生）のレジリエンス

境目のない暮らしや、さまざまな働き方を認め合い、試行錯誤（特に失敗）が許容される暮らし、本質的なしあわせを求める、変化の時代に、問い、考え、動き続けることを恐れずにいられる社会にになっていくためにどうすればいいのか。

③ これからを支援する人をどう育てるか

繋ぎ手、翻訳家、関係性を紡ぎ、橋を架けるコーディネーターの存在はあらゆるシーンで必要とされている。そんな人材を育て、かつその役割を続けていける社会にになっていくために何が必要か。

■ 第2回

「これからの豊かさ、しあわせをどう実現していくか。」

第1回の①～③の対話を手掛かりに、これからの豊かさ、しあわせとは何か、どう実現していくか、を考える。

■ 第3回

第2段階とりまとめ（案）に対する意見集約

第2段階 第1回 議論の経緯

1月16日（日）

ファシリテーター 石井貴広 森山佳祐 矢作郁瑠 横山紗央里

第1グループ

「これからの地域社会の編み方」

セクターを越え、コミュニティを横断する地域社会、多様な中に包摂性のあるコミュニティのあり方をどう構築するか。協働と共創、関係人口、地域での学びの場、変化を恐れない地域社会をどう残していくのか。



自分と違う意見に耳を傾ける人が増えてほしい 助け合える社会にするためには、お互いに理解しあうことが大切

地域には暗黙のルールがあることで変革を起こしにくい 変化を起こしたい人たちが横で繋がると大きな変化が生まれる



地域にどんな人がいるか共有される機会が欲しい

違うコミュニティ同士をマッチングする役割を持った人が必要だと思う



地域をつなぐ翻訳者のような役割が必要 地域の課題を市や県に要望するだけでなく、地域としてうまく解決できないか

いきなり大きな変化を生むのは難しいが、小規模でもやってみせて、少しずつ周りの「いいね」を広げ、大きな変化にしてい



POINT

- ① 地域に関わる人々の意識の変化 地域を捉え直し、多様性、変化を受け入れる。
- ② つながり・気づきを生む場づくり お互いが支え、認め合う場、地域を知り、学び合う場をつくる。
- ③ 双方向の関係性をつくる 提供する側・される側ではなく、主体的に支え合える、これからの共助の形を作っていく。

第2グループ

「これからの暮らし（人生）のレジリエンス」

境目のない暮らしや、さまざまな働き方を認め合い、試行錯誤（特に失敗）が許容される暮らし、本質的なしあわせを求め、変化の時代に、問い、考え、動き続けることを恐れずにいられる社会になっていくためにどうすればいいのか。



みんなが同じルートで生きていくのが当たり前、という価値観をまず変えていかなければ

学校の成績などにとらわれない「評価軸の多様性」が社会に広まっていくことが大切



どんな状態であっても、その人が望むような自己実現できる道が閉ざされないようなサポートが社会として求められる

失敗を恐れる文化が染みつき、自分からSOSを出すことを躊躇しがちな大人に対して、まわりから手助けする仕組みが必須



病気、障がい、様々なセクシャリティなどが当たり前存在しているインクルーシブなコミュニティが必要

世代、所属する組織といったコミュニティの垣根を越えて、人と人がつながる場所（ごちゃまぜの場）をつくる



POINT

- ① これまでの「当たり前」から離れ、人々の考え方や価値観が変わっていく。
- ② 既存の社会の仕組みや制度を見直し、多様性と公平性を確保する。
- ③ すべての人が支え合い、互いの個性を認め合うインクルーシブな環境を整える。

第3グループ

「これからを支援する人をどう育てるか」

繋ぎ手、翻訳家、関係性を紡ぎ、橋を架けるコーディネーターの存在はあらゆるシーンで必要とされている。そんな人材を育て、かつその役割を続けていける社会になっていくために何が必要か。



ボランティア等に対し教える側が頑張り過ぎて準備をしてもフェードアウトされる 自分で何か価値や面白みに気づいたほうが、長続きする

官民の連携がより一層重要になってくる



一つの分野の中でも、川上の人と川下の人はお互いに何が必要か、わかっていない状態

分野内での共通の価値判断ができる基準を作ることが必要。まずは整理。分野を横断していくのはその後になるはず



繋げる人もどんな支援が必要かわかっていない。その中で何が大切なのかの共通の価値判断の基準もない

新しいチャレンジをする以前に、川上・川中・川下間が相互に会話できる「場」を設けることの優先度が高い



POINT

- ① 教わる＋学ぶ視座を養う 先輩や先生から「教わる」/自分の興味関心について、主体的に「学ぶ」。
- ② 川の流れを整理する 川上・川中・川下で分断している川の流れを川中が中心になって整え、お互いを知る。
- ③ 川の流れを整理する「場」、分野同士を繋ぐ場づくり すべての関係者が上・中・下の現状を「場」の中で「教わる」。

第2段階 第2回 議論の経緯

1月30日（日）

これからの豊かさとは、しあわせをどう実現していくか？

ライフスタイルの変化、真に必要とされる地域文化、地域コミュニティの再構築、社会包摂によって成立する社会、質的变化を求める産業、人生100年時代の学び、これからの豊かさ、しあわせとは。それをどう実現していくか。

「これからの地域社会の編み方」グループ



選べる、ということが「豊か」なのでは？

自分の人生をコントロールできていることが豊かさ、しあわせだと思う



過去はみんなしんどいけど助け合って生きて来た現在は大変なことのアウトソーシングが進み負担は減ったが関係性が希薄になった よい塩梅は？

自分が楽しめる（しんどくない）範囲で地域社会に貢献することが個人と社会の幸せに結びつく



困っていること 課題に思っていること 相互に情報発信することでお互いにとって必要なものを考えていけるのでは

ミツバチのように色んな所を飛び回ってつないでくれる人がいるとよい



POINT

- ① 地域に関わる人（住民、行政、企業）が地域の「今」を知ること。
- ② 地域の文化、風土、新しいチャレンジ、困りごとetc...を発信すること。
- ③ 地域内外をつなぐ人、硬直化した考えをほぐす人（ミツバチ）が必要。

「これからの暮らし（人生）のレジリエンス」グループ



一人ひとりが自分らしい生き方を実現できる社会はどんな姿か？

生まれた家庭、与えられた環境によらず、すべての人が同じ機会やサービスなどにアクセスできる社会では



周囲が失敗やうまくいかなかったことに対して寛容である社会だと思う



多様性を認めることが必要になってくるが、無理してわかり合おうとすることで逆に分断を生むこともある 対話は難しい...



興味や関心、価値観で形成される「テーマ型コミュニティ」が多様に林立していて、すべての人がどこかに所属できるとよい

マイノリティよりもマジョリティに支援が偏っているのでは 支援のバランスが大切 マジョリティ側に寛容さが必要



POINT

- ① 多様性を認める社会であること。
- ② 「テーマ型コミュニティ」が林立し、すべての人がどこかに所属できることが大切。
- ③ マジョリティ、マイノリティに対する「公正」な行政や社会の支援の枠組みが必要。

「これからの支援する人をどう育てるか」グループ



若い人に向けて都会志向だけが豊かさではないということを知らせたい

色々な選択肢があることを知ってほしい



自分で見つける魅力もあれば、人から知らされる魅力もある

自分の経験や知識が役にたったらいいなと思うことがあるが、若い人との接点がうまく持てない



壁はそれぞれが作っている 悪いものではない 橋がかかっていたらいい

わからないことは悪いことではない。対話や体験の共有を重ねていくことで、越えやすくなる 橋を架けるのはつなぎ手の役割



POINT

- ① 豊かさの多様性を示す
- ② 世代間のつなぎ方を考える
- ③ 「壁」を取っ払うのではなく、橋を架け、行き来しやすい状態をつくる

第2段階 第3回 議論の経緯

2月13日（日）

第2段階とりまとめ（案）について意見交換

「これからの地域社会の編み方」グループ



「利他」が大切だというのはよく分かるが、自己犠牲というようなニュアンスを自分は感じてしまう

「感謝の関係性」は唐突感がある
上下関係を生んでしまう



「自立」の意味を伝えては
「自立することは依存先を増やすこと」という表現がいいと思った

「誰もが」ゆるやかなつながりや多くの所属を「生み出し、関われる」社会をつくる、のほうがいい？



「ソーシャルキャピタル」が何を示すのか
補足したほうがいい

対話を繰り返すことが一番大事



「これからの暮らし（人生）のレジリエンス」グループ



"Diversity（多様性）"、"Inclusion（包摂性）"、"Equity（公平性）"が入っているところは良いと思う

「利他の精神」という言葉から、自己犠牲を想起する



このチームでの議論は、自分の幸せを追求した先に、社会貢献にもつながっていく「自己実現」が主たる方向性だった

誰の立場からの文章なのか 「わたしたち」とは誰か 「行政」と「県民」？



行政としての主体性が問われる
今後行政側がどう行動するのか

行政に期待することとして、①県民が自己実現することを支援すること、②対話の場をたくさんつくること、③県民のトライ＆エラーを邪魔しないこと



「これからの支援する人をどう育てるか」グループ



つなぎ手のしあわせは、つながりができることで自分の居場所になること
つながりが新たにつながりを生むこと

それぞれの負担、犠牲が必要なつながりはあまりよくない。自主的なつながりがいい
離れてもOK



色々な分野が混ざり合う場から、分野ごとのコミュニティが形成されていくことがいい
長野県全体で

文化とは。関わる人達によって変化するもの
文化そのものが変わっていてもいいが、感謝の気持ちは変わらないでほしい



スポーツに限らず、さまざまな面で、だれもが楽しめるようなレクリエーションの要素も含んだ場を作り出したい

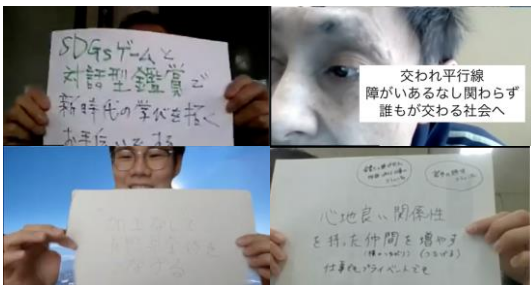
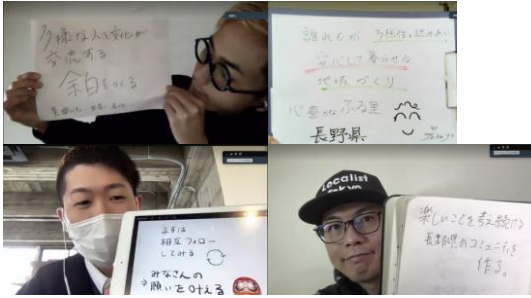
行政はアイデアや交流の場を拡げる役割
場を提供する役割 主体というよりは下支え



上記意見を検討し、とりまとめへ（P4）

第2段階 参加者の行動宣言

第2段階終了に際し、参加者の皆様お一人おひとりに、今後に向けた「行動宣言」をしていただきました。



- 楽しいことを考え続ける 長野県のコミュニティをつくる
県内の面白い人たち同士をつなぐようなコミュニティをつくりたい 明確に誰と一緒にというのはもう少し詳細が詰まって来たら考えたい
- 多様な人と文化が交流する余白をつくる 意図しない出会い創出
コミュニティの重要性は明らかだが、そもそも交流する余裕がない現状があると思う 特定のコミュニティのための場ではなく、意図しない出会いを生み出せるような余白を生み出したい
- 誰もが多様性を認め合い、安心して暮らせる地域づくり 心豊かなふる里 長野県
- それぞれの地域の活動をつなぎ合わせながら、地域に変化を生んでいけたら 今回の参加者ともfacebookでつながり、それぞれの活動に対していいねをしていく ちょっとしたことでも認めてもらうことは大切
- まずは相互フォローしてみる みんなの願いを叶える
- みんなのことをまず知りながら、縁の下の力持ちのような存在に
- 行政の人たちを役所から引っ張り出す！
- 地域で農業を通じて交流、ITで担い手を募集
- 今現在なんとなく信州にFitしていないと感じている人が暮らしやすい（働きやすい、生きやすい）場をとともに立ち上げる
- 「信州これから会議」に参加した者としていろいろな場のコーディネーターになっていきたい
- 県立長野図書館から社会的処方を広げる！
- 公であり県民、できることを最大限に
- 「交われ平行線」 障がいあるなしに関わらず誰もが交わる社会へ
- 「SDGsゲーム」と「対話型鑑賞」で新時代の学びを拓くお手伝いをする
- “加工なし”で長野県内をつなぐ
- 心地よい関係性を持った仲間と横のつながりを増やす（仕事でもプライベートでも）